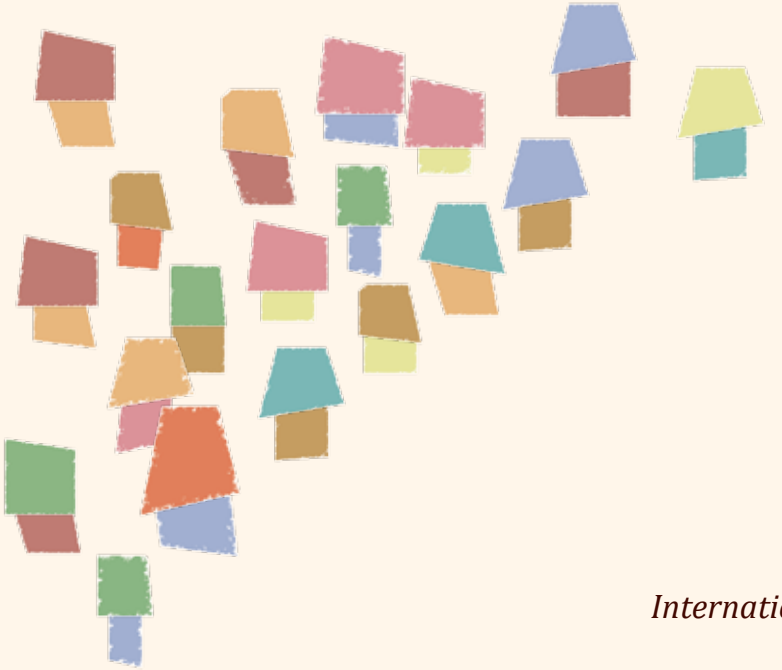


International Workshop & Symposium

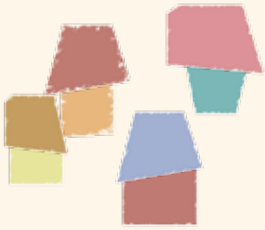
Multicultural Society

International Migration and Diversified Communities

多文化社会

—国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ—

開催報告



2017年5月
公益財団法人 トヨタ財団

『多文化社会 ―国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ』

ワークショップ・シンポジウム概要

2013 年度から 2015 年度までの 3 年間にわたって国際助成プログラムの主要な助成テーマの一つであった「多文化社会」につき、北東アジアと東南アジアの助成プロジェクト関係者を招聘し、神戸にて視察・ワークショップおよび一般公開シンポジウムを開催しました。

本企画は、これまでの助成事業の成果となる各国での知見を取りまとめ共有し、各助成対象プロジェクト関係者同士の将来に続くネットワークの構築・強化を目的として行われました。同時に、実施に当たっては、2015 年度フォーラム助成のプロジェクトメンバーである神戸大学国際文化学研究推進センター(Promis)・青山教授及び同センターと連携し、アジアにおける移住・移民に加えてヨーロッパ(地中海)における移民・移住についても相互に知見を取り入れる機会を提供しました。

一般公開シンポジウム及び若手研究者による発表機会を組み込むことで、日本を含むアジアにおける移住・移民の状況を共有し、さらに、トヨタ財団の助成事業の成果を各国に広く発信する一助となれば幸いです。

【開催概要】

日時	2017 年 1 月 19 日(木)から 1 月 22 日(日)
活動・場所	① 現場視察: ＜大阪＞大阪市立南小学校、コリアタウン ＜神戸＞海外移住と文化の交流センター、たかとりコミュニティセンター、中華街 ② 参加者ワークショップ 於)神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ、海外移住と文化の交流センター ③ 公開シンポジウム 於)海外移住と文化の交流センター
参加者	約 30 名(①②) 約 100 名(③)
言語	日本語、英語 ※③公開シンポジウムのみ、日英同時通訳あり

はじめに

トヨタ財団国際助成プログラムが 2013 年度から 2015 年度までの 3 年間、助成テーマの一つとして掲げてきた「多文化社会」。これまでの助成事業の成果と知見を共有し、助成対象プロジェクト関係者同士のネットワーク構築と強化のために、2017 年 1 月 20 日～22 日に国際ワークショップ＆シンポジウム「多文化社会―国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ―」が開催された。

本企画のコア参加者は、国内外からの国際助成対象者、共催機関である神戸大学国際文化学研究推進センターの研究者、そしてトヨタ財団関係者の総勢 30 名であった。年齢、性別、国籍、活動地域、職業等々において多様な参加者がそろい、共通のテーマである「多文化社会」について、それぞれの経験と知識を持ち寄り、3 日間議論を重ねた。その内容について報告する。

モントレ神戸での懇親会の様子

ワークショップ①　問題提起「なぜ私たちは他者を支援するのか？」

2017 年 1 月 20 日午前中

前日にアジア各国、日本全国から神戸市内に集まった参加者らは、バスに乗り、最初のワークショップが開催される大阪市内へと移動した。ワークショップ会場は大阪市北区にある神戸大学梅田インテリジェントラボラトリであった。

大野満トヨタ財団事務局長の開会の挨拶にて、3 日間の本プログラムが本格的に幕を開けた。続いて、同財団の楠田健太プログラムオフィサーより、企画趣旨と日程が共有された。次に、その場に集まった参加者全員の自己紹介を行い、各人が関わってきたトヨタ財団助成プロジェクトや研究内容について発表する時間をもった。

参加者による自己紹介の様子

自己紹介の後、マイクはワークショップコーディネーターの安里和晃氏（京都大学）に渡り、この 3 日間で参加者が考えるべき「宿題」について話された。それは、「なぜ私たちは他者を支援するのか？自分たちの活動をどう社会に理解してもらうのか？」という設問である。

今回集まっているのは、多様な背景をもつ移民を包摂する社会を作るという課題について、受入国と送出国、両者の観点からミクロレベル、マクロレベルで活動し、そして政策提言に取り組んできた実務家および研究者である。長年取り組んでいるからこそ、自明視されがちな活動の動機を今一度問い直す機会とした。そして、近年無視できなくなってきた考え方の異なる他者、特に移民排斥を訴える人々に対して、多文化社会実現に向けた理解をどう浸透させていくのか、というのも目を背けてはならない課題である。3 日間を通して考えていくことになった。

栢木氏の発表

また、期間中に実施する現場視察のための事前学習として、原めぐみ（大阪大学・当時）より大阪の外国人住民の統計や歴史的背景について、栢木清吾氏（神戸大学）より神戸の多文化社会の歴史と現状について紹介があった。

大阪視察：大阪市立南小学校「自文化理解を基盤とした多文化共生の学校」

2017 年 1 月 20 日 13:00～15:00

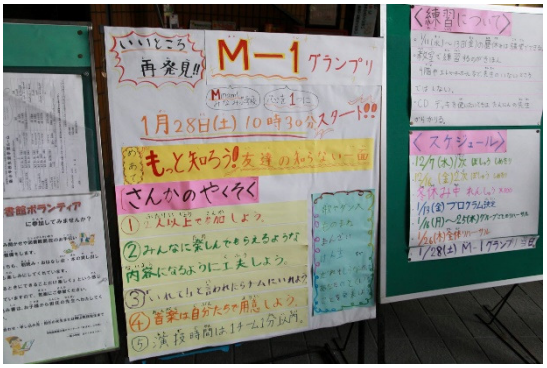
現場視察は、全児童数 180 名中 42%が外国にルーツをもつという大阪市立南小学校訪問から始まった。政令指定都市の中でも最も外国人人口の多い大阪市。南小学校は生野区に次いで 2 番目に外国人住民の人口が多い中央区に位置する。中央区は、大阪最大の繁華街を抱える大都会である。同区は、韓国・朝鮮籍の住民が圧倒的に多い生野区とは異なり、外国人住民の多国籍化が特徴だ。南小学校も一時、児童がもつルーツの国数が 15 か国にも上ったという。

山崎一人校長からの発表と、テレビで取り上げられた際の映像を見ながら、南小学校の取り組みを学ぶことができた。また、発表の後には実際の授業風景を見学させていただいた。

学校紹介をする山崎校長

山崎氏は、小学校が日々直面する児童や保護者の厳しい現実について語った。2012 年 4 月、この地域で外国人母子家庭の実子刺殺自殺未遂事件が起こり、当時小学 1 年生だった南小学校の児童が命を落とした。この事件は、外国人親子の複合的な困難さを象徴しており、それが最悪の形で表出したのだった。このような事件をもう二度と繰り返さないために、山崎氏をはじめとする南小学校の先生方は、徹底した議論を行ってきたのだという。

こうした議論から導き出された南小学校の取り組みを聴くことができた。それは、①対話型日本語学習や ICT の活用などを取り入れた授業の見直し、②つながりを大切にした基本的な生活習慣の確立、③自文化理解を基盤とした多文化共生の学校、クラスづくりの 3 点である。校内見学の際、少人数での国語の授業や、日本語教室での対話型学習の取り組み、さらに児童が住む中央区について街歩きをしながら学習した成果などを見ることができた。また、校内のあちらこちらに多言語で書かれた挨拶や標識などが掲示されていた。



児童が企画したイベントの掲示物

社会のグローバル化が急速に進む中、こうした取り組みを続けている南小学校は、今、様々な文化と出会い、自然に豊かな感性を育める学校として注目を浴びているのだという。

また、山崎氏は、公教育の限界にも言及され、様々なステークホルダーと協働し、事業化した「Minami こども教室」の活動紹介もされた。同教室は、外国にルーツをもつ子どもたちを対象とした学習支援と居場所づくりを目的としている。先述の事件から教訓を得て集まった学校、大学、NPO、行政、市民ボランティアの経験とスキル、ネットワークを活かして 2013 年 9 月に開設された。毎週火曜日に学校近くの中央区「子ども子育てプラザ」で活動を行っている。参加する子どものほとんどは南小学校児童と、南小学校を卒業した中高生だ。この活動の火付け役となったのも山崎氏だった。

山崎氏は、教員として新任当時より大阪で働く中、同和教育そして人権教育を熱心に実践してこられた。その情熱を今、多文化共生の学校づくりに手向けている。「多文化共生」という言葉を出すと、「なんで外国人のことばっかりやねん」という批判を浴びることもあるという。しかし、山崎氏は、「自文化の大切さを伝えることは、国籍や文化的背景に関わらず、どの子どもにとっても良い環境を作ることに繋がる」と力強くおっしゃった。参加者らは校長の言葉に心を打たれ、さらに南小学校そして Minami こども教室の活発な取り組みに感銘を受けた。

大阪視察：コリアタウン「在日コリアンに学ぶ多文化社会の課題」

2017 年 1 月 20 日 15:00～

次に、一行は大阪市生野区に向かった。生野区は戦前より在日コリアンが多く住み、近年では「コリアタウン」として再開発が進み、観光地化されつつある。この地に事務所をかまえる特定非営利活動法人コリア NGO センターの金光敏氏の案内により、鶴橋駅高架下から、現在「コリアタウン」として再開発が進んでいる地域まで視察することができた。

JR および近鉄線鶴橋駅周辺の商店街は、韓国食材店や衣類、雑貨屋等がひしめき合っていた。もともとは日本人が店を営む市場であったが、戦後日本の店主たちが在日コリアンに土地を売却したことにより、現在見られるような市場になった。

コリアタウンフィールドワーク中の様子

街を歩いていると、食材店などにベトナム語表記が見られる。生野区では近年、ベトナム人が増えているのだという。ニューカマー住民が増えているのは、生野区に中小企業が多く働き口があること、街が多様性に寛容な雰囲気であることや、外国人でも家を借りやすいなどの要因があるようだ。

金氏は、朝鮮学校の校門前に一行を案内した。在日 3 世、4 世の子どもたちが通っている。北朝鮮政府から支援を受けていることから、日本と北朝鮮の関係が悪化するたびにこの学校やここに通う子どもたちが余波を受けることになる。また、全校児童の 7 割が朝鮮半島にルーツをもつ大阪市立御幸森小学校の現状についても話された。大阪市内では、この小学校を含め 106 校で教育課程外の時間に民族教育が実施されている。3 世、4 世の子どもたちに母語を教え続けることは極めて困難なことだ。朝鮮半島の言葉や文化の維持は、在日コリアンとしての誇りの維持である。しかし、この民族教育に関しても、「公的資金を使うな」「廃止すべきだ」という圧力がかかるのだという。

金氏によるフィールドワーク中の様子

フィールドワークの後、全体で金氏の話を聞く時間をもった。彼は、この地域の貧困や差別の経験を語った。これらは、個々人の思いやりや配慮の欠如といった問題だけではなく、合法的な差別、国家からの排除の問題も大きく影響している。国民健康保険や公教育へのアクセスなど、制度上の課題がたくさんあったのだ。金氏は幼い頃、境遇が悪いのは親のせいだと思い、努力しても報われるという感覚がなかったという。しかし、中学時代の教員が「こんな生活をしているのは、朝鮮人のせいじゃない。困難な中でも君を生んだお父ちゃんとお母ちゃんは立派や」と言ってくれたのだそうだ。その教員との出会いと、民族学級で学び直した経験により、現在のソーシャルワーカーとしての金氏がいる。

金氏は、時代を超えても、今なお貧しさや差別に苦しむ人がいることに怒りと申し訳なさを感じるのだという。登場人物が韓国・朝鮮人から中国人、フィリピン人、ブラジル人へと変化しただけである。在日コリアンが経験してきた差別を今の世代の子どもたちに経験させないよう、現在、金氏はニューカマーの支援にも情熱を注いでいる。具体的には、先述の Minami こども教室の実行委員長として、中央区で外国人親子の支援にあたっている。貧困や差別を再生産している社会への憤りが金氏の原動力になっている。

金氏は、多文化共生を考えるとき、在日コリアンの問題には触れない人が研究者や支

援者の中にも多いことを大変残念に思っているという。在日コリアンの歴史や現在にも続く不平等な現状を学ぶことを避けて通っていては、本当の意味での共生にはならないのではないか、と問題提起がなされた。参加者は、その言葉の重みを熟考する機会となった。

神戸視察：たかとりコミュニティセンター「震災復興の過程で生まれた多文化なコミュニティ」

2017 年 1 月 21 日 15:30～17:00

2 日目の視察地であった神戸市長田区の「たかとりコミュニティセンター」では、センター常務理事の吉富志津代氏から創設経緯と現在の活動内容について説明を受けた。

神戸市は歴史的に多様な人々が暮らす地域だったが、阪神・淡路大震災の復興の過程で、大きなパラダイムシフトが起こった。それは、出自に関係なく、隣人と助け合うという意識が生まれ、市民活動が活発化したということだ。

現在、たかとりコミュニティセンターはカトリックたかとり教会と併設されている。「ボランティア元年」と言われた 1995 年、カトリックたかとり教会は救援物資の拠点となり、多くのボランティアを受け入れた。未曽有の被災状況の中、カトリック信者であるか否か、日本人あるいは外国人ということは関係なかった。

当時、長田地区には、全人口の 10%にあたる約 10 万人の外国籍住民が住んでいた。もともと靴産業が盛んなこの地域は、在日コリアンの集住地域であり、難民として来日したベトナム人、そしてブラジル人やフィリピン人なども多く住んでいたのだった。震災直後は、情報提供が急務であったため、ボランティアがやさしい日本語を使って対応するとともに、ラジオを使って多言語で情報発信を行った。震災の経験から、多様性を重視すること、そして少数者の視点を取り入れるという素地ができ、現在までの活動につながっているのだという。

現在は 10 の団体がこのたかとりコミュニティセンター内に事務所を置いている。震災時の情報発信がきっかけで生まれた多言語コミュニティ放送局「FM わぃわぃ」。母語教育の充実に向けて支援をし、行政などに政策提言をしている「ワールドキッズコミュニティ」などの団体が軒を連ねる。吉富氏が代表を務めるワールドキッズコミュニティは、トヨタ財団の助成を受け、バイリンガル教育環境をテーマとした政策提言に取り組んでいる。

同センターの強みは、自立支援活動に長けていることと、自治体との協働事業も盛んであることである。吉富氏の報告と、センター内の見学から、ここから多文化社会のモデルケースが次々と生まれている理由が理解できた。

たかとりコミュニティセンターでの吉富氏の発表風景

シンポジウム「多文化共生：国際的な人の移動と多様性のあるコミュニティ」

2017 年 1 月 21 日 10:00～13:00

1 月 21 日に一般公開で行われたシンポジウムでは、各地域の移民政策に関する調査を行う研究者と、トヨタ財団国際助成でプロジェクトを実施してきた実践者の両者から報告が行われた。

まず、トヨタ財団理事長の遠山敦子氏より、開会の挨拶があった。また、神戸市市長室国際部長の山村昭氏、神戸大学理事の井上典之氏から挨拶をいただいた。

シンポジウム会場

基調講演では、神戸大学の坂井一成氏が「ヨーロッパ・地中海の移民問題とガバナンス」、フィリピン・スカラブリニ移民センターのマルジャ・アシス氏が「移民子弟と多文化家族のための包摂的な社会の実現に向けて」という演題で研究成果を発表した。

第一講演者の坂井氏は、欧州連合における歴史的・政治的なマクロレベルの分析結果と各国における最新の移民・難民問題について報告した。EU の拡大、とりわけ東側・南側諸国の加盟により移民流入が顕著である。1985 年のシェンゲン協定により、EU 加盟国内での人の移動が自由になったが、不法入国者への対応が課題である。また、2010 年にチュニジアから始まった「アラブの春」以降、北アフリカからの難民が増加している。社会統合においては、合法入国者を対象としてきたため、不法入国者や緊急的に受け入れた難民への対応は加盟国間でもギャップがある。ドイツが移民・難民の受け入れにリーダーシップを発揮する中、南ヨーロッパでは受け入れに消極的だ。移民政策の構築に向け、各国の取り組みが見られるが、それぞれに移民・難民の受け入れに対して葛藤

があると坂井氏は述べる。各国の足並みがそろわない中、国家レベル、EU レベル、UNHCR や ILO などの国際機関等グローバルレベルで枠組みづくりが議論されている。2016 年の伊勢志摩サミットでも移民・難民が初めて議論に上ったが、今後は、グローバルレベルでの方向性が他のレベルに大きく影響していくのではないか、と結んだ。

坂井氏による発表の様子

第二講演者のアシス氏は、トヨタ財団の助成を受け、2015 年より「ENABLE Kids Project」を牽引している。このプロジェクトは、移民の子どもや多文化家族の現状とその支援を調査し、政策提言を行っている。

ユニセフは、2015 年において世界の移民 2 億 4000 万人のうち 3100 万人、難民 2100 万人のうちおよそ半数の 1000 万人が子どもであると報告しているが、これまで国際移動といえば労働移動が中心で大人を主軸に考えられてきたという。

アシス氏は、国際移動現象における子どもの流動性に着目し、多文化家族のための包摂的な社会の実現に向けた具体的な支援の事例を交えながら報告した。移住過程や各国の移民政策によって、子どもの権利がはく奪される可能性が危惧される。子どもは紛争や暴力、そして貧困に対して責任を負うべきではなく、必要な支援を受ける権利を持っているのだと強調した。

「ENABLE Kids Project」が、日本、韓国、フィリピンで調査を行ったところ、先進的な支援体制が各地にあることが報告された。フィリピンでは、1970 年代以降の OFW（Overseas Filipino Workers）、すなわち海外フィリピン人労働者の増加が、フィリピンにおける家族の形をも変容させてきた。親は労働者として海外に住み、子どもはフィリピンで祖父母に育てられるということは、もはや当たり前となった。また、親の移住先について行く子ども、あるいは移住先で生まれる子どもも増えており、プロジェクトが調査した日本と韓国では民間レベルで支援の輪ができつつある。さらに近年では、フィリピン人の若者グループが形成され、より年少の者へのサポートに取り組んでいる事例もあるという。最後にアシス氏は、今後の発展に重要なことは、子どもを出自で区別することなく、どの子も「私たちの子ども」として市民社会と国家レベル、送出国と受入国で連携していくことだ、と述べた。

アシス氏の発表の様子

続いて、話題提供として、トヨタ財団国際助成プロジェクト助成団体からの代表者と本企画を共催した神戸大学大学院国際文化研究科ならびに同大国際連携推進機構の研究者、計 4 名が報告した。

金氏の報告の様子

助成団体からは、神戸定住外国人支援センター（KFC）の金宣吉氏が登壇した。金氏は、神戸における多文化化の現状を発表された。現在神戸ではアジア系の定住者が増加している一方で、外国人の生活保護受給率が日本人の 2.5 倍という現状もある。さらには、外国籍の子どもの公立高校進学率は日本人の半分以下である。KFC は、阪神・淡路大震災以降、20 年の活動実績がある。その特徴は、事業自体ではなく、事業を運営する体制にあるという。それはスタッフの多くが外国にルーツを持ち、またルーツも多様であるということだ。

金氏は、テッサ・モーリス＝スズキがいうような「Cosmetic multiculturalism（表面的な多文化共生）」に留まることなく、真に人権が尊重され、差別なき社会にしなければならないと力強く語った。

安岡氏の発表の様子

次に、神戸大学から、米国の最新の動向について「トランプ主義と移民保護都市」という 演題で安岡正晴氏が報告した。トランプ主義とは、米国第一主義を掲げる、反グローバル主義的な考え方である。一方、移民保護都市とは、移民・難民の受け入れに対して積極的な都市のことである。トランプ大統領は移民保護都市をなくそうとする考えを示している。オバマ元大統領が連邦政府主導で行ってきた不法移民保護とは真逆の動きに、今後もリベラル派と保守派の攻防が続きそうだ。

針間氏の発表の様子

次に、トヨタ財団助成団体であるメコン移住ネットワークのコーディネーター、針間礼子氏より「『寛容』を超えて―メコン地域におけ る移住者の社会的包摂」というタイトルで報告があった。

針間氏が活動するメコン地域は、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、中国雲南省の国境地帯にあり、3 億人以上の人口を抱えている。助成プロジェクトでは、受入国としてタイと日本、送出国としてミャンマーとカンボジアを選定して活動をしている。タイでは、移住者が安全を求めて移住し、労働者としてタイの経済発展に貢献しているにも関わらず、権利は侵害されているという。日本でも、外国人労働者の受け入れについては明確な方針が欠けている。また、メコン地域の移住者は、ミャンマーやカンボジアなどの出身国に帰国した後も困難な生活を続けることになる。プロジェクトの成果としては、各国政府や関係省庁に政策提言を行い、また市民向けに写真展を開催したり、マルチメディアプレゼンテーションを YouTube にアップするなどした。針間氏は、『寛容(Tolerance)』という「望ましくない存在を大目に見る」という受け入れ社会にはびこる考え方を払拭し、平等な社会の一員として移住者と共に生きていく受け入れ方が実現するようにこれからも活動を継続すると述べた。

クレック氏の発表の様子

話題提供の最後は、神戸大学国際連携推進機構ウラディミール・クレック氏から「ハイブリッドなアイデンティティ:西ヨーロッパにおける市民的統合方針への挑戦を考える」との演題で研究報告があった。2016 年に勃発したトルコ国軍によるクーデター騒動(未遂)の後、トルコ人がケルンで集会を行った。それがドイツとトルコの間に緊張をもたらした。トルコ出身の移民に対し、トルコ人なのか、ドイツ人なのか、という問題を突きつけた。クレック氏は、移住者のアイデンティティは多層的であり、容易に測ることはできないはずである、と述べた。

その後、神戸大学青山薫氏による進行のもと、基調講演者ならびに話題提供者 6 名によるパネルディスカッションが行われた。

まず、多文化社会の実現における地域・コミュニティの役割について、議論がなされ

た。坂井氏は、コミュニティは人々を守る存在にも排除する存在にもなり得ると答えた。またクレック氏は、ドイツで 2004 年から使われるようになった「市民統合」の方針を引用し、民族性の尊重を前提に、市民として地域生活に馴染んで行くことが求められるという。さらに金氏は、固定化した「○○人、○○文化」や「外国人と日本人」などの区分に関わらず、「他者と他者」が生きて行く上で守らなければならない人権を基本にこれまで地域で活動を続けてきたという。

また、移民を合法・非合法と線引きする是非についても話し合った。日本では「非合法」と「不法」が同じように使われているため、合法化の道筋について検討されていないことが指摘された。その他にもフロアからもたくさんの質問があった。本シンポジウムを通し、緻密な研究成果と豊かな実践的経験が共有され、「多文化社会」の実現に向けた意見交換を聴衆と共に行うことができた。

パネルディスカッションの様子

ワークショップ②「どう社会に理解してもらうのか」

2017 年 1 月 22 日 10:00～12:00

初日のワークショップにおいて、司会者の安里氏が参加者に出した宿題「なぜ私たちは他者を支援するのか？自分たちの活動をどう社会に理解してもらうのか？」という質問が、最終日のワークショップでの主題となった。3 つのグループに分かれ、様々な団体や研究現場を持つ参加者による具体的な議論が行われ、今後の展開に向けた方策を出し合った。以下、発表の内容をまとめる。

ワークショップの司会者、安里氏

まず、多文化社会を推進するにあたっての懸念点について指摘があった。「お花畑多文化共生」では、表面的な多文化理解に留まってしまい、高い壁を越えることができない。また、災害や事件のような悲しい出来事

を共有しなければ他者を思いやることの重要性に気づけないのか、という意見が出た。こうした表面的で受け身の支援を続けるのではなく、「プロアクティブに」権力のあるマジョリティに訴えかけていく必要があるという意見が出た。また、「外国人」といったカテゴリーが、個人の意見を埋没させてしまう可能性についても話し合われた。共通の課題へのアプローチと、個々の背景に則した柔軟性のバランスをとっていくことが重要だと確認した。

次に、教育の重要性について改めて検討された。大阪視察の際に訪れた南小学校の教訓から、教育の中で変革を起こしていけないか、と提案があった。例えば、教員養成課程における多文化教育や、教育現場でのグローバル市民教育の導入などである。

最後に、政策提言における新たな方策について話し合った。行政における縄張り意識と政策の継続性のなさが指摘される中、シンポジウムでアシス氏が言及したように、市民団体による政策提言の機会が増えるとより多様なアイディアが盛り込まれる。また現在、民族主義的な思想を持つ人々は、「恐れ」や「不満」を感じていると言われている。その恐れを払拭することが他者理解の第一歩なのかもしれない。

グループでまとめた意見を発表する参加者

ワークショップの最後に安里氏は、多様性やセクターを超えた従来に代わる考え方が今求められている、と述べた。多文化社会実現に向けて研究や実践活動をする人々はまだ小さい世界の中にいる。逆風の中でも、負けない新たな方策が必要な時期なのかもしれない、と締めくくった。

3 日間を総括して、トヨタ財団から代表して顧問の浅野氏より閉会の挨拶があった。ビジネスの世界でも、諦めずに「Win-Win 関係」を築いていくことにより、良い結果が見えてくるのだと述べられた。

シンポジウム、ワークショップでも触れられたように、近年、欧米諸国では、移民・難民の受け入れに後ろ向きで、保守的な党派を支持する世論が増している。このような中で、日本を始めとするアジア諸国は、今まさに、さまざまなステークホルダーが協働し、一つ一つの壁を乗り越えていく時期にきている。本企画を契機に、助成団体同士の協働事業などが今後発展していくことが期待される。

◉ レポート執筆：原めぐみ（和歌山工業高等専門学校 総合教育科 助教）

和歌山県出身。2016 年大阪大学大学院人間科学研究科より博士号（人間科学）取得。大阪大学未来戦略機構特任助教を経て 2017 年 4 月より現職。「Minami こども教室」の実行委員を兼任している。2013 年～14 年「グローカルな教育支援モデル構築プロジェクト」（代表：内田晴子氏）、2015～16 年「安全な移動プロジェクト」（代表：稲葉奈々子氏）に携わった。専門はフィリピンと日本をフィールドにした国際社会学。著書：横田祥子・原めぐみ「表象としての「女性」」『東南アジアシリーズ 2 巻社会』宮原曉編,慶應義塾大学出版（2017）。Takahata Sachi and Hara Megumi, “Japan as a Land of Settlement or Stepping stone for 1.5-generation Filipinos.” In I. Nagasaka and A. Fresnoza-Flot (Eds.), *Mobile Childhoods Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*. London: Palgrave(2015).ほか。

【参加者一覧】

国名・所属	参加者名（所属）
日本・ 神戸大関係	青山薫(神戸大 Promis、日下部氏 P メンバー) 栢木清吾(神戸大 Promis) 坂井一成(神戸大 Promis) 八十田博人(共立女子大教授) 岡部みどり(上智大教授) 安岡正晴(神戸大学大学院国際文化学研究科 准教授) ヴラディミール・クレック(神戸大学国際連携推進機構 特命准教授) グエン・タン・タム(神戸大学 Promis、学術研究員) 稲津秀樹(慶應大学、日本学術振興会 PD) 鈴木弥香子(慶應大学博士後期課程) 井田頼子(東京大学博士後期課程) 金南咲季(大阪大学博士後期課程) 佐藤良輔(神戸大学 Promis 博士院生) 黄 柏瀧(神戸大学 Promis 修士院生) 余 玟欣(神戸大学 Promis 修士院生) 行俊奈津子(神戸大学 Promis スタッフ)
日本・ トヨタ財団助成対象者・関係者	明石純一(筑波大学准教授、2013－14 年度多文化分野研究会メンバー) 安里和晃(京都大学准教授、2013 年度、2014 年度助成対象者) 内田晴子(2013 年度助成対象者) 金 宣吉(2016 年度助成対象者) 土井佳彦(ユン・カンイル氏 P メンバー) 長坂格(マルジャ・アシス氏 P メンバー) 原めぐみ(大阪大学、内田氏 P メンバー、稲葉氏 P メンバー) 松原ルマ(神戸定住外国人支援センター) 吉富志津代(2013 年度、2014 年度助成対象者)
フィリピン	河野尚子(稲葉氏 P メンバー、フィリピン・マリガヤハウス) マルジャ・アシス(2015 年度助成対象者)
韓国	ユン・カンイル(2015 年度助成対象者)
タイ	日下部京子(2014 年度、2015 年度助成対象者)

	スリポーン・プンプイング(マヒドン大学、日下部氏 P メンバー) マレー・スンプワン(マヒドン大学)
タイ、カンボジア、ミャンマー	針間礼子(2013 年度、2015 年度対象者)
トヨタ財団	遠山敦子(理事長)、浅野有(顧問)、大野満(事務局長)、楠田健太、利根英夫、笹川みちる(国際助成)

【プログラム】

日時	活動	場所
1 月 19 日(木)		
午後	遠方参加者神戸入り ・各自ホテルにチェックイン	モントレ神戸
夕刻	歓迎夕食会	
1 月 20 日(金)		
9:00	ホテル出発　大阪へ移動	
10:00	ワークショップ① ・挨拶 ・オリエンテーション:プログラム概要等説明　安里和晃(京都大学)、事務局 ・個別プロジェクトプレゼンテーション ・大阪・神戸の概況　栢木(神戸大学)・原(大阪大学)	神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ
13:00	大阪視察 ・大阪市立南小学校 ・コリアタウン	大阪市中央区 大阪市生野区
17:30	コリアタウンにて夕食	
19:00	バス、コリアタウン発	
20:00	バスにてホテル帰着 一部関係者・スタッフ:シンポジウム事前打合せ	

1 月 21 日(土)		
9:00	ホテル出発　会場へ移動(徒歩)	
10:00	公開シンポジウム ・開会挨拶 ・基調講演 坂井一成(神戸大 Promis) マルジャ・アシス(フィリピン・スカラブリニ移民センター　ディレクター) ・話題提供 金宣吉(神戸定住外国人支援センター理事長) 安岡正晴(神戸大学大学院国際文化学研究科　准教授) 針間礼子(メコン移住ネットワーク　コーディネーター) ウラディミール・クレック(神戸大学国際連携推進機構　特命准教授) ・パネルディスカッション ・会場質疑応答 ・閉会の挨拶	海外移住と文化の交流センター
14:00	レイトランチ	
15:30	神戸視察 たかとりコミュニティセンター	神戸市長田区
19:30	夕食懇談会	
1 月 22 日(日)		
9:30	ホテル出発　会場へ移動(徒歩)	
10:00	ワークショップ② コーディネート:安里和晃(調整中) ・コメント ・グループディスカッション	海外移住と文化の交流センター
午後	解散 ※オプション:「中南米音楽祭」参加	